

シャルル・ウダール (1855-1931) の版画作品におけるジャポニスム

あらき こうたろう
荒木 弘太郎 (ソルボンヌ大学)発表
要旨15
時
45
分
|
16
時
25
分松
ヶ
崎
・
東
キ
ャ
ン
パ
ス
内
60
周
年
記
念
館
1F
記
念
ホ
ール

シャルル・ルイ・マルセル・ウダール(Charles Louis Marcel Houdard, 1855-1931)は19世紀後期から20世紀初頭にかけて、パリで活動したフランス人画家、版画家である。

ウダールの作品の特徴を最もよく示すものは、彼が1894年頃から制作を始めた色彩銅版画である。当時、ジャン=フランソワ・ラファエリ、マリー・カサットといった芸術家達によって、銅版画をカラーで印刷する技術が試みられていた。その決定打とも呼べる技術を開発したのが、画家であり、版画印刷業者でもあったウジェーヌ・デュラートルである。ウダールはデュラートルの技術を利用し、それまで水彩画やモノクロームの銅版画で行われてきた、ヨーロッパ各地の風景の立体的かつ精密な描写を実現した。一方で、ウダールは、サミュエル・ビングが創設した「日本美術愛好家協会」の一員であった。エドモン・ド・ゴンクールが著書の中で、北斎のコレクターの一人として名を挙げるウダールは、多くの浮世絵師による作品を所有し、日本の浮世絵などに影響を受けたジャポニスム作品も多く発表した。

ウダールと同時代のアンリ・リヴィエールをはじめとする多くの芸術家の作品に見られるジャポニスム作品の特徴は、浮世絵に倣ったモチーフや構図の単純化、抽象化である。そして、これらの多くには木版の技術が使用された。一方で、ウダールの銅版画によるジャポニスム作品は、モチーフこそ浮世絵など日本美術の影響を受けつつ、西洋の銅版画の技法や伝統にもとづいた精密で、立体的かつリアルな表現を踏襲している。

ウダールの、特にジャポニスムについては、フランスにおいてもまだほとんど研究されていないのが実情である。しかし、日仏両国で現在ではほとんど知られていないこの芸術家の足跡と作品群は、フランスにおける、特に銅版画という分野におけるジャポニスムの展開を知る上で、非常に大きな価値を有している。

今回は、特に彼の初期の色彩銅版画である《蜻蛉と金蓮花》(1894年頃)と、《蛙とアイリス》(1894年頃)を取り上げる。これらは、喜多川歌麿の《画本虫撰》(1788年)に影響を受けた作品である。作品の具体的な分析を、デュラートルやリヴィエールといった同時代の版画家の作品や、ウダール自身の木版画作品との比較も交えて行う事で、この銅版画家のジャポニスムの特性を明らかにしたい。